

研 究 情 報

(Information)

**北大西洋におけるカイアシ類*Calanus*の個体群変動：
Calanus finmarchicus の大西洋横断調査から（報告）**

標記国際シンポジウムが1999年8月24日～27日にトロムソ（ノルウェー）において、国際海洋探査委員会（International Council for the Exploration of the Sea, ICES）の主催、トロムソ大学他の共催で行われた。コンピーナーはKurt Tande博士（University of Tromsø）とCharles B. Miller博士（Oregon State University）であった。

寒帯・亜寒帯の海洋では、大型動物プランクトンの主体は*Calanus*属カイアシ類により構成されており、それらはタラ類を中心とする魚類の重要な餌となっている。しかし動物プランクトンの分布や生産は気候変動や海洋環境変動の影響を受けやすく、魚類に対する餌供給量の変動は漁業生産に重大な影響を与えている。1996-1998年の期間、北大西洋の*Calanus finmarchicus*の個体群変動と海洋環境変動に関するEUの共同研究（Trans-Atlantic Study of *Calanus finmarchicus*, TASC）が行われた。本シンポジウムはそのプロジェクトで得

られた成果を発表すると同時に、世界各地に分布する他の*Calanus*属カイアシ類についても情報を交換し、全世界の*Calanus*属カイアシ類の個体群変動と海洋環境変動との相互作用、さらには漁業生産との相互関係を解明することを目的として開催された。カイアシ類の単一属のみを扱ったおそらく世界初の国際シンポジウムであろう。

主として北大西洋に面する国々を中心に合計20カ国から100人余りの出席者があり、一会場の比較的小さな研究集会であった。本邦からは私一人の出席であった。会議の最初の3日間は主として*C. finmarchicus*に関するセッションであり、それぞれ1) 成長、再生産、死亡、被食、2) 個体数変動、生活史、3) 物理-生物学モデル、気候変動との対応のテーマで、2題の招待講演に続いて一般講演、ポスターセッションが行われた。会議最終日の4日目が遺伝的変異、その他の*Calanus*属カイアシ類に関するテーマで行われ、私はここで*C. sinicus*がなぜ陸

棚海域で大きな個体群を維持できるかに関する招待講演を行った。また会議3日目の夕方、トロムソの一般市民を招待したオープンセッションで、A. Ianora博士が「バイオテクノロジーとプランクトン」、J. Runge博士が「プランクトンと漁業」について平易に講演し、カイアシ類がなぜ水産業や海洋環境にとって重要であるかを市民にアピールする機会が設けられた。この

ような機会を通して研究活動を市民に理解してもらうことは、日本のプランクトン研究者も大いに参考にしていよいことと思われる。

本シンポジウムのプロシーディングは、約1年後にICES Journal of Marine Scienceとして発刊される予定である。

上 真一 (広島大学生物生産学部)